

テレビにおける「農業・農村」表象とその構築プロセス (2)

——NHK『明るい農村 (村の記録)』を事例として——

○東京大学 祐成保志
静岡文化芸術大学 船戸修一
滋賀県立大学 武田俊輔
静岡文化芸術大学 加藤裕治

1 目的

本報告の目的は、NHKの農事番組『明るい農村』(1963~1985年)の枠内で制作された「村の記録」の放送内容の検討を通して、1970年代のテレビ・ドキュメンタリーにおける農業・農村表象の特徴とその変遷を明らかにすることである。

「村の記録」という番組名が登場するのは1960年のことで、当時は「NHK農業関係番組の中で、唯一のフィルム・ドキュメンタリー」(NHK編, 1961, p. 199)とされた。1964年には総合的農事番組『明るい農村』の1コーナーとなる(放送頻度は週1回)。「村の記録」は「わが国最初のテレビ農業番組『伸びゆく農村』のあとをついだもの」(NHK編, 1966, p. 110)と位置づけられ、『明るい農村』の中でも中核を占めるコーナーであった。

2 方法

我々が同番組の分析に着手できたのは、NHKアーカイブス(埼玉県川口市)が実施する「学術利用トライアル」の一環として、2011年9月から2012年7月にかけて、同アーカイブスで保管されている「村の記録」を閲覧する機会を得たからである。ただし、現在保管されている約500本の「村の記録」のうち、ネガフィルムおよびシネテープ形式の媒体は閲覧できなかった。このため、今回分析対象としたのは、VHSテープ形式で保存されている192本のみである。これらの放送時期は、1971年4月5日から1980年3月26日までの約10年間である。

3 結果

1970年代の「村の記録」に登場した主要なテーマは、「出稼ぎ」、「減反」、「農業の近代化(機械化・化学化)」、「開発」、「食糧輸入と日本農業」、「農業・農村活性化」である。「村の記録」は、同時代の農政への批判を基調としつつ、農業・農村をめぐる幅広い社会問題を取り上げた。強調されたのは、高度経済成長の裏側で苦悩する農業・農村という像である。

4 結論

『伸びゆく農村』(1957年)の制作意図は「考える農民、科学する農民の成長に役立つ」(NHK編, 1957, p. 68) 教育的啓蒙であった。それは、農業・農村の近代化そのものに疑義を提出し続けた「村の記録」とは対照的である。一方、1980年代以降の農事番組では、生産の場としての「農村」から消費の場としての「食卓」への焦点の遷移が鮮明になった。1970年代の「村の記録」は、近代化と消費社会化が交錯する地点において成立した特異な映像資料である。

文献 NHK編, 1957, 『NHK年鑑』日本放送出版協会。
——, 1961, 『NHK年鑑』日本放送出版協会。
——, 1966, 『NHK年鑑』日本放送出版協会。
船戸修一・武田俊輔・祐成保志・矢野晋吾・市田知子・山泰幸, 2012, 「テレビの中の農業・農村」『村落社会研究ジャーナル』37, pp. 37-47.